

スーパーマン

瀬戸内市立長船中学校

三年生 高原 巳 和

私のスーパーマンは、空を飛ぶこともできないし、敵を一撃で倒すようなレーザービームや、パンチをすることもできない。けれど、どんなヒーローよりもかっこいい。色は、ブラック。必殺技は、石を積んで石垣を作ること。私のスーパーマンは、静かな山里で自然が豊かな田舎に住んでいる。そう、私のスーパーマンは、大好きなおじいちゃんなのだ。スーパーマンの口癖は、「ちよちよちよ」だから自称、ちよちよのじいちゃんとも呼ばれている。

スーパーマンは、蜂の子もパクリ、消費期限がとくに過ぎた物もパクリ、と食べてしまう。向かうところに敵無しなのかもしれない。

でも時々、スーパーマンより強い奴が現れる。それが、私の母だ。スーパーマンは、私が幼い頃よく私に高い高いをして遊んでくれた。ある日、いつものように高い高いをしていると、「グキ」という音と同時に、私が泣きだしてしまった。高い高いをした拍子に、私の肩が外れてしまったらしい。私が泣いていると、母がスーパーマンにむかって

「お父さん、なんでそんなことするん。手が動かなくなったらどうするん。」

と言った。すると、スーパーマンはなにも言えず、小さくなってしまった。そんな姿を見ていると、スーパーマン大丈夫かなと思ってしまうていた。

けれどやっぱり、スーパーマンはスーパーマンなのだ。

今年の夏、私は二人の姉と三人でスーパーマンの家に遊びに行った。三人で庭に居ると、急にスーパーマンが現れ、

「見てみい。これじゃこれじゃ。」

と言って、白いビニール袋を持って来た。中から出てきたのは、何か黒っぽい物が入ったビンで、よく見ると目があって、ビンに触ると冷たかった。

「おじいちゃん、これなに？」

「なんじゃって、モグラじゃ。いつもより、でかいモグラが捕れたけん見しちゃうと思うってとっといたんじゃ。」

触ってみるとふわふわで、今にも動き出しそうだった。

「おじいちゃん、モグラ殺したの？」

スーパーマンは主張する。

「殺したんじゃねえ、死んだんじゃ。カンカンにな、土入れて遊ばせとったら死んだけん、冷凍庫に入れといたんじゃ。」

どおりで冷たいと思った。スーパーマンはモグラも取っ捕まえてしまうらしい。

「おじいちゃん、そのモグラさ、ストレスで死んじやったんじゃない？」

すると、スーパーマンは、

「へへへ。」

と笑って、嬉しそうにモグラをビンにしまいこんで、また冷凍庫に向かって消えて行った。スーパーマンの後ろ姿をみる私たちは、ただ笑い続けてしまった。

それだけではない。スーパーマンの凄さは無限大だ。ブランコを作ってほしいと頼むと、次に行った時には、木でつくられた立派なブランコが柱に吊るされてあるし、私が川に行きたい

と言うと、おいしげる草を全て刈りあげて、川を遊べるようにしてくれた。小学校の時、竹馬に乗れなくてスーパーマンに相談すると、山から竹を切ってきて、翌朝庭に出ると、私にピッタリあった竹馬ができていた。そしてスーパーマンは、私が歩けるようになるまでずっと見守ってくれた。私を楽しませてくれるこんなに素敵なスーパーマンは、ここにしかないだろう。さらに、スーパーマンは物知りで、何でもパツと答えてしまう。

「おじいちゃん、この虫なに？」

「それは、げんごろうじゃ。ほれ。」

と言って、気持ち悪い虫を素手で掴み、こっちに差し出してくる。虫を持っている手は、すごくぶ厚くて、真っ黒で大きい。爪は割れていて平べったいところもある。手からもスーパーマンの凄さが伝わってくる。

スーパーマンは、今年の夏で満八十歳になる。お盆は、スーパーマンの子供と孫が集まり、傘寿のお祝いをした。傘寿とは、傘という字の人の部分を抜き取ると、八十と読めること。また、人という字がたくさんあることから、たくさんの人との関わりやふれあいという意味があると言われているらしい。スーパー

マンは、子供も孫も全員集まってくれただけで嬉しいと言ってくれた。傘寿のお祝いにぴったりの言葉だと思った。

傘寿のプレゼントは、孫たちからの言葉にした。祝いの言葉が終わると、スーパーマンは真面目な顔をして、話をしてくれた。私は、その話にどっぷりのめり込んでいた。自分が手が空いている時は、人を手伝う。そうすることで、本当に困った時に自分にかえてくる。人をまねるだけではなく、自分から学ぼうとする姿勢が大切。自分の能力に合ったものを選ぶ。知能を生かして、自分を輝かせる。あたりまえのようで、すごく大切なことだ。

その中でも、一番心に残った話がある。

「人の悪口を言うんじゃないで、自分の生き方を考える。一生懸命やれば必ずいいことがある。」

なんだか、私のことを言われているような気分になった。私は、なにに関しても一生懸命になれずに終わっている自分がいた。人のことを気にして、本当の自分に気づけてないこともあった。スーパーマンは、なんでもお見通しなのだろうか。

スーパーマンの側に居ると、なんだか自分自身がちっぴけな存在に思えてしょうがない。人一倍、いや二倍、三倍努力して、

本当に優しい心の持ち主で、人を楽しませる力もある。なんで

もできて、まっすぐに生きている。だからこそ、おじいちゃん
は私のスーパーマンであり、あこがれの存在であり続けている。

スーパーマンは、私たちが家に帰るとき、いつも言う。

「ほな、用心してな。」

人のことを思いやることのできるスーパーマンだからこそ、
その言葉を聞くと、心がほっこりしてくる。私の大好きなスー
パーマン。

この夏、スーパーマンがくれた言葉は、私の宝物だ。